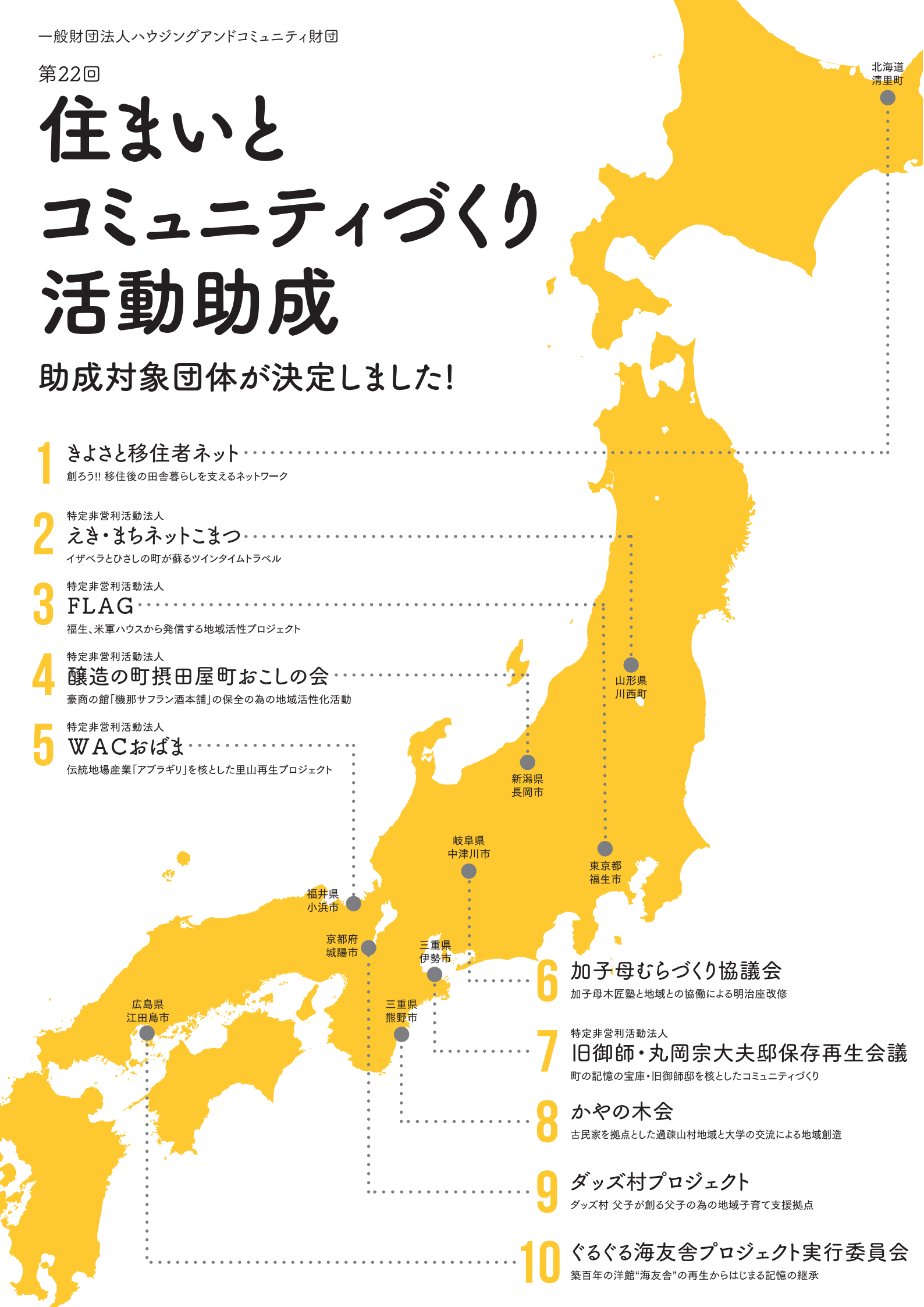
一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

第22回

住まいとコミュニティづくり活動助成

助成対象団体が決定しました!



1 きよさと移住者ネット
創ろう!! 移住後の田舎暮らしを支えるネットワーク

2 特定非営利活動法人
えき・まちネットこまつ
イザベラとひさしの町が蘇るツインタイムトラベル

3 特定非営利活動法人
FLAG
福生、米軍ハウスから発信する地域活性プロジェクト

4 特定非営利活動法人
醸造の町摂田屋町おこしの会
豪商の館「機那サフラン酒本舗」の保全の為の地域活性化活動

5 特定非営利活動法人
WACおばま
伝統地場産業「アブラギリ」を核とした里山再生プロジェクト

6 加子母むらづくり協議会
加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修

7 特定非営利活動法人
旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議
町の記憶の宝庫・旧御師邸を核としたコミュニティづくり

8 かやの木会
古民家を拠点とした過疎山村地域と大学の交流による地域創造

9 ダッズ村プロジェクト
ダッズ村 父子が創る父子の為の地域子育て支援拠点

10 ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会
築百年の洋館“海友舎”の再生からはじまる記憶の継承

きよさと移住者ネット
［北海道清里町］

創ろう!! 移住後の田舎暮らしを支えるネットワーク

農業に従事する移住者を中心に結成された団体。移住者同志の交流を図り、不安や孤立を取り除き新旧住民の良好なコミュニティを醸成するとともに、移住希望者のコーディネーター的存在となることを目指している。今年度は、食事会（地元の食材で郷土料理などを作る）やガイドツアーによる登山、イベントへの出店、産後ケア講座等を行う。新住民のネットワークが旧住民に好影響を与え、地域の活性化につなげることも考えている。

特定非営利活動法人
えき・まちネットこまつ
［山形県川西町］

イザベラとひさしの町が蘇るツインタイムトラベル

無人駅化への危機を打破するために、地元の高校生やOB・OGを中心に駅の業務の受託や、地元の農産物を活用した駅前でのチャレンジショップの運営などに取り組んできた。助成対象活動では、地元を訪れたイザベラ・バードの足跡を辿る古道を復元し、地元出身の井上ひさしの生家や資料館、作品に登場する神社などを回るルートを整備して、まちなか巡りを実施する。観光資源の開拓による町民駅の利用者の増加を見込んでいる。

特定非営利活動法人
FLAG
［東京都福生市］

福生、米軍ハウスから発信する地域活性プロジェクト

東京の西多摩地区を拠点として、地元のアイデンティティを見つめ直そうと若いアーティストたちで結成された団体。横田基地を有する地域の文化的資源ともいえる米軍ハウスだが、その数は年々減少している。これまでに解体予定だった一棟のハウスを改修し、活用のための調査研究を行ってきた。今年度はこのハウスを拠点に酪農家と連携した農業体験や、アーティストを招いたイベント等を行い、地域の新しい魅力づくりにつなげていく。

特定非営利活動法人
醸造の町摂田屋
町おこしの会
［新潟県長岡市］

豪商の館「機那サフラン酒本舗」の保全の為の地域活性化活動

江戸時代からの醸造業が集積した地域資源として、昨年、一部が整備された「機那サフラン酒本舗」の蔵屋敷を対象とする活動。地元醸造業の経営者が中心メンバーとして名を連ねている。建物と庭園を一般公開し、保存を願う市民の会も立ち上げられた。今年度は建物に応急処置的な補修を施し本格修復に備える。邸内整理や庭園整備などに住民の協力を得るとともに、イベントや冊子を通して観光資源としての価値を増大させる。

特定非営利活動法人
WACおばま
［福井県小浜市］

伝統地場産業「アブラギリ」を核とした里山再生プロジェクト

かつて桐油が基幹産業だった地域には、産業が衰退した後もアブラギリが生い茂る。アブラギリの可能性に着目し、昨年は地元の高校生と協働して種の圧搾方法の確立、葉寿司の開発、きのこの原木化などに取り組み、成果を住民に披露した。今年度は、アブラギリの地域産業化に向けて、地元企業と連携した食の開発、若狭和紙を活用した商品開発などを行い、拠点を活用してアブラギリをテーマにした体験型観光の可能性を探る。

6

加子母むらづくり協議会
［岐阜県中津川市］

加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修

地域の自立を目指し全住民が参加して組織化された団体。平成7年から各地の建築系の学生を招き加子母木匠塾を開校して、地元の工務店の指導の下、実践的な建築を学ぶ場を提供し住民との交流も図ってきた。木匠塾を開校して20周年を迎える今年度は、学生に例年行っている木造建築物の制作に加え、メモリアル行事として、明治27年に村の有志によって建てられた芝居小屋「明治座」の改修を住民との協働で行う。

7

特定非営利活動法人
旧御師・丸岡宗大夫邸
保存再生会議
［三重県伊勢市］

町の記憶の宝庫・旧御師邸を核としたコミュニティづくり

最盛期には伊勢に800軒ほどあった御師邸だが、唯一現存しているのが旧丸岡邸である。地域で歴史的建造物の保存・活用の実績を有するメンバーが活動に携わっており、これまでの保全修理が実を結び、御師邸の内部が使用できるようになってきた。使用可能な空間において地域の歴史文化を紐解く御師塾の開催や、おもてなしの精神を今に伝えるお弁当の商品化など、御師を切り口とした地域ブランドの形成を目指している。

8

かやの木会
［三重県熊野市］

古民家を拠点とした過疎山村地域と大学の交流による地域創造

地域のシンボルである古民家（茅の木館等）の保全について調査研究するとともに、山村体験施設として古民家を活用する方法について検討する活動。高齢化が進んで限界集落となってしまった地区において、これまでに調査フィールドとして湯谷地区を訪れてきたいくつかの大学と連携のもと、大学生に滞留してもらう山村遊学、村都連携ネットワークの構築等を行う。地元の人と大学との協同で、山の記憶を後世に残すことを目指している。

9

ダッズ村プロジェクト
［京都府城陽市］

ダッズ村　父子が創る父子の為の地域子育て支援拠点

現役の父親たちが、子どもたちや次世代の親となる若者の育成を目指して行う家づくりの活動。家づくりにあたっては、「原理原則のものづくり」を掲げ、父親、若者、子どもが一緒になって、稲刈り、土壁づくり、竹小舞編み、内部造作工事までの実際の家づくりを、可能な限り地域でとれる材料を使うとともに、電動工具などは使わずに肉体労働で行う。一連の作業を通じて、親同士の交流、子どもの健全育成を目指している。

10

ぐるぐる海友舎
プロジェクト実行委員会
［広島県江田島市］

築百年の洋館“海友舎”の再生からはじまる記憶の継承

江田島は海軍兵学校があった場所であるが、これまで兵学校があることにより江田島の暮らしにどのような影響があったかについて、きちんと語られることがなかった。兵学校の施設である「海友舎」の再生・利用を通して地域の問題解決につなげるため、地元および周辺に居住している人々が江田島の歴史を学び、地域の高齢者に江田島の暮らしについてヒアリング調査を行う。これらの成果を冊子にまとめることで地域文化の継承を図る。

選考を終えて

選考委員の講評

総評

選考委員会委員長 **鈴木輝隆**（江戸川大学 教授）

■はじめに

今回も応募件数が224件と多く、住民のコミュニティづくりへの関心の高さを実感しました。グローバル化が急速に進展し市場主義が進み、効率性や合理性が求められ、相互扶助がなくなりコミュニティが空洞化し、これを解決しようとする住民活動はますます求められているのでしょうか。

当財団のミッションは助成金が住民活動に有意義に使われ、活力ある楽しいコミュニティの実現につながることで達成されます。ただ、近年増えてきた若い人たちの活動は、実際事業を始めてみて持続することの難しさに気がつき、どうしていいのか困っている場面も出てきています。活動団体の事業を継続させる方法や経営にまで、これまでに助成した団体とともに知恵や工夫を出していくことも必要な時代になっています。選考された団体は活動を実施していく中で困ったことなどありましたら、財団に相談していただき、これまでの経験とノウハウを得ることで、より効果を上げてほしいと願っています。

■選考にあたって

ここ数年の傾向を大きく括りますと、古民家を修復し活用する空き家系、貴重な建造物を伝承し活かす伝統建造物系、芸術活動で活性化を行うアート系、コミュニティ活性化の拠点を作るカフェ系、集客力を活用する商店街活性化系、コミュニティとしての子育て系、若い人が主体となる若者系、震災復興を行う災害支援系、条件不利地域の村おこし系などがあります。これまでにはない視点からのコミュニティ活動で、今後の指針となる内容のものは高い評価が得られます。

■選考された団体について

今回選考しました団体への評価を簡潔にまとめてみました。

ダッズ村プロジェクトは父親と子どもが一緒になり、子育て支援拠点を建設することは冒険のようで楽しい活動です。父親の子育てを中心に展開される事例は珍しくしかも分かりやすい活動と評価されました。

特定非営利活動法人WACおばまは伝統的な「アブラギリ」をテーマに住民と高校生が一緒になり栽培・活用・商品化を進める里山再生事業で、伝統文化伝承や産業的、教育的な意義は大きく、成功事例に育ってほしいと継続助成することにしました。

加子母村づくり協議会は木材産地の工務店と10大学で「木匠会」を結成し、木造住宅の技術の伝承などを通じて地域と学生の交流が20年間も続いてきたことに感心しました。住民自治組織の象徴的な建物「明治座」の修復を行うことは輝かしい成果になります。

きよさと移住者ネットは農村部にお嫁に来た女性の産後ケアや子育てを支援することをめざしています。移住者の経験が基になった女性の視点が評価されました。

特定非営利活動法人えき・まちネットこまつは、高校生が駅を守るために立ち上がり、その活動に専念するために退職した先生や卒業生が一緒になってJR駅業務を受託、イザベラバードや井上ひさしをテーマにしたまちづくりに取り組むことに期待しています。

特定非営利活動法人醸造の町摂田屋町おこしの会は大学生や市民の参加を得て伝統的建造物「サフラン酒本舗」を一部修復し公開イベントを開きました。ただ雨漏りの補強などなお緊急性がある修復が求められていることから、継続助成を決めました。行政の理解も得て後世に残してほしいです。

かやの木会は20年以上続けてきた活動から、山村生活の記録と伝承を大学と連携する創造的サバイバルに期待しています。

ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会は若者たちが江田島独特の暮らし文化をデザインした冊子の出版から伝統的建物への理解を深めることに期待をしています。

特定非営利活動法人FLAGは、基地が持つ「米軍ハウス」を活かして、独特のコミュニティを築くことに惹かれ評価されました。

特定非営利活動法人旧御師・丸岡宗太夫邸保存再生会議は、伊勢に残る1軒しかない貴重な歴史遺産で、財団の助成がきっかけで修復がはじまり、さらに全国モデルとなるようなツインタイムトラベルをめざしています。

■さいごに

選考委員はできる限り現地に行き、助成金を出すだけでなくアドバイスなど行い継続力のあるコミュニティ活動団体を育てることも役割であると思っています。

講評

遠藤幹子（Mother Architecture 代表理事）

昨年度に引き続き、2回目の審査に関わらせて頂きました。選考にあたって重視したのは、地域の特徴を汲み上げていること、多くの共感を得られる案であること、一過性のイベントに終わらず継続的な活動であること、メンバーの推進力と求心力が強いこと、そして、できるだけ多くの人が参加でき、次世代へのバトンタッチを見据えた教育的な内容が盛込まれていることでした。

その中でも、これまで国内外の地域の課題解決にデザイナーとして関わって来た経験から、二つのことを重視しました。まず一つめは、「独自のチャーミングさ」についてです。このような活動で重要なのは、どれだけ参加する人がワクワクし、大人からこどもまで沢山のファンが集まり、地域外の人でも「行ってみたい、住んでみたい！」と思える、斬新でオリジナルな魅力があるかです。ですので、他の地域でも見たことのありそうな企画や、思想は素晴らしくても楽しさや明るさに欠け、人が集まるか疑問に思えるものは、対象から外させて頂きました。

二つめは、「地域の人がどれだけエンパワーされるか」です。様々な問題を抱える地域が、その魅力を再発見して活気を取り戻すためには、ある程度、外部の客観的な視点や専門性を持った人の協力が必要です。しかし、その協力者のほうが主人公になってしまっては、それを今後も育む地域の人が育ちません。あくまでも主人公は、その地域の人たちです。ですので、住民の参画について具体的な計画がされている案を積極的に採用し、外部講師の招聘費用など地域外の人が動くことに予算が多く振り当てられている案は、対象外とさせて頂きました。

今年度は残念ながら、応募書類を拝見する限りでは、強く応援したい、是非訪問したいと思える活動が少なかったです。限られたフォーマットで活動の本質をアピールするのは難しいとは思いますが、どんな場面でも100％魅力を伝えることは、人を動かすのに大切なことです。「私たちが、活き活きとした日本を取り戻すお手本になるのだ！」という強いモチベーションで、どうぞこれからも活動を続けて頂けたらと思います。

講評

窪田亜矢（東京大学 准教授）

「住まいとコミュニティづくり」という本活動助成の主旨は、改めて考えてみると不思議なところがある。「住まい」とは個人や世帯のモノという素朴な認識があり、一方で「コミュニティづくり」と掲げているからだ。

近代化が進む前、地域社会は地域の環境を享受する方法をもっと熟知していた。農業や漁業や林業といった地域の大地と向き合いながら、専業というよりは生業複合によって生きてきた。一番重要な単位は「家」だが、今で言う「コミュニティ」も生き抜くためには本質的な存在だった。産業構造の転換や家族のあり方の変容などを経て、当然のようにめぐっていた時間が、地域に固有の循環が、おかしくなってしまった。今回、助成に向けて推させていただいたのは、そうした循環を元に戻そうとしている取り組みである。必ずしも選定結果がそうなっているというわけではないのだが、私個人はそのように考えた。

地域が活性化するというときの根底にあるのは、そこでの暮らしが続いて行くであろうという希望だ。さらにいえば、その希望を、一人ではなく、地域において共有できることではないかと思う。そうした結果として、「コミュニティ」なるものが生じるのではないかと考えている。

地域における循環を創造するという壮大なプロジェクトもないことはなかったが、あまりの困難さゆえに実現性に乏しかったり、連携まで語れなかったり、短期的なビジネス開発のように読めたり、といったところに留まってしまったものが多かった。しかしそうした状況を単に残念だという感想で終わらせるのではなく、ささやかながら引き取って自分なりの展開をしていきたい。今回、申請が適わなかった皆様には、どうぞあきらめずにもう少しだけ取り組んでいただいて、そのご経験をふまえたうえで、より確度が高く、実際の現場で突き当たった問題を超えるためのご提案を来年もしていただければ大変有り難いと思っている。

講評

小伊藤亜希子（大阪市立大学 准教授）

今年も地域の歴史的建築資源を再生し、それを拠点にしてまちづくりに取り組もうとする試みが多く見られました。中でも地元住民が主体で、地域への“愛”が感じられるものが選ばれました。加子母むらづくり協議会は、建築系学生に木造建築づくりの実習の場を提供し、次世代の担い手を育てながら地域おこしに成功している貴重な取り組みです。20周年を節目に明治座の改修に挑戦するとのことでぜひ応援しようということになりました。FLAGは、若いアーティストたちが米軍ハウスに自ら住み、住み開きをしながら活動している団体で、とにかく楽しく活気に溢れているところが評価されました。地域に根付き、地域の住民を巻き込んでネットワークが広がることを期待します。

過疎や限界集落の再生を目指す活動も各地で見られました。人口減少時代に入り、高齢化と過疎化に悩む集落の課題は、簡単には解決できない深刻さを増していると感じました。そんななか、きよさと移住者ネットは、既存住民が移住者を迎え入れようとする暖かいコミュニティづくりの取り組みです。特に目新

しい活動内容という訳ではありませんが、地域のニーズを直接受け止めたこうしたごく日常的な取り組みが大切であると選定されました。

すでに過去に本助成を受けたことのあるプロジェクトへの助成については、同じところに重複して助成するより、なるべく広く多様な活動に助成すべきという考え方もありましたが、今年は、きちんと成果をあげていることを前提としながら、継続してバックアップし、活動を育てる方針としました。えき・まちネットこまつ、WACおばま、醸造の町摂田屋町おこしの会、旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議は、それぞれ2度目の助成となりますが、さらなる活動の発展を期待します。

講評

図司直也（法政大学 准教授）

本助成には地域づくりの最前線の動向と重なり合うところが多く、毎年結果を楽しみにしています。その点で、今年度の応募書類の中には、最終選考まで残りながら最近の潮流への意識が弱いために、散漫な内容が見受けられたのは気になるところです。そこであくまで私見になりますが、今後の活動に活かして頂きたい想いも込めて、以下に4つの要点をまとめてみます。

一つ目は、何より「独自性」です。本助成には全国各地からの応募がある中で、納得して選べる要素が見出されるか―例えば、新規性の強いものであったり、地域の特徴を前面に打ち出したり―が大きな決め手になってきます。その点で、今年度のダッズ村プロジェクトは、子育てを担う父親主導の地域づくりはこれまでにない新しい視点であり、意欲的な活動報告を期待したいところです。

二つ目は、「総合性」です。「住まいとコミュニティづくり」という助成名には、ハードとソフトの両立が目指される活動への助成が詠われています。その点で、加子母むらづくり協議会は、合併前の地域をカバーする協議会が主体となって、加子母木匠塾の開校20周年を祝って学生たちとともに芝居小屋の改修を行うプログラムであり、ハードとソフトの両面をうまく織り込んだ取り組みです。限られた助成金をうまく活用する知恵にも注目したいところです。

三つ目は、「継続性」です。助成期間は1年間ですが、翌年以降は財源がなくなったために活動が行き詰ってしまっては本末転倒です。その点で、特定非営利活動法人えき・まちネットこまつは、NPO法人の設立に伴い、助成だけに頼らない財政基盤の確立を目指して、資源活用の新たなプログラムが打ち出されています。経済的にも自立を目指した活動の展開も欠かせません。

そして最後に四つ目は、「主体の多様性」です。特定非営利活動法人WACおばまは、10年近く活動してきたNPO団体が、地区住民や高校生とともに、アブラギリという資源の活用を多角的に進める内容です。このように、女性や子どもたち、若者や地域外の人材など、様々な主体の巻き込みや広がりから時代にあった新たな価値が地域に生み出されて欲しいところです。

このような要点を自らの活動に引きつけてアピールするには、客観的に活動を振り返る作業も大事になります。その点で、これまでの助成対象団体をはじめ先発的な活動からも知見を得た、意欲あふれる応募書類が次年度に届くことを期待したいと思います。

講評

高見沢実（横浜国立大学 教授）

今回の10件は、継続または以前に助成されたプロジェクトが多く、それらはいずれも継続的に発展がみられるという意味で頼もしい存在です。例えば、旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議は平成23年の助成対象団体ですが、当時、まだ始まったばかりの活動の発する魅力を申請書に感じ取り、イベントの際に私も参加させていただき、申請書だけではわからない現場のポテンシャルを強く感じていましたので、今回の進展がとても楽しみです。えき・まちネットこまつはさらに1年さかのぼりますが、当時、高校生たちの活動が魅力的でした。どう展開しているか楽しみです。昨年度からの継続となるWACおばまと醸造の町摂田屋町おこしの会は、昨年も高い評価だったものです。

逆に、今回初めての新しいテーマで注目されるのはダッズ村プロジェクトとFLAGです。ダッズ村は多くの委員が言及すると思いますので、現代文明論を示すポンチ絵が魅力的だったことだけお伝えしておきます。もう1つのFLAGは、他にないユニークさに惹きつけられました。最近、「右肩下がり」の時代状況からどうしても“空家・空地活用”“限界集落”などに注目が集まりがちですが、一方で、これからの日本には多様性が必要です。FLAGには、明るくいろいろな人たちと交流し、日本でありながら日本ではない“米軍ハウス”を媒介として活動を盛り上げようとするエネルギッシュな魅力があります。ゆくゆくは首都圏をぐるっとつなぐ「国道16号線サミット」などに発展してもよいのではなどと妄想(?!)も抱きながら、注目していきたいと思います。

なお、江田島で活動するぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会は、図書の作成を一段目の目標にしてそれを活動PRの材料としつつ、一方で活動拠点の厨房を改造して自立した資金を得る活動へ発展させていこうとする方針が注目されます。

東日本大震災後関連では、南相馬市朝日座を楽しむ会の活動が継続・進化し、昨年末には朝日座が登録文化財になるところまで到達しています。引き続き、過去の助成対象団体にも注目していきたいと思います。